



A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

35

室生犀星

中央公論社

室生犀星

昭和41年12月5日初版発行

昭和49年2月1日14版発行

発行者 高 梨 茂

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 株式会社トープロ
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 株式会社トープロ
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 文京紙器株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

犀星詩抄

抒情小曲集より	7
青き魚を釣る人より	15
愛の詩集より	19
第二愛の詩集より	22
寂しき都会より	26
星より来れる者より	29
田舎の花より	31
忘春詩集より	33
高麗の花より	37
故郷図絵集より	39

鶴より

鉄 集より

哈爾浜詩集より

幼年時代

性に眼覚める頃

あにいうと

舌を噛み切った女

杏っ子

はるあわれ

我が愛する詩人の伝記抄

島崎藤村

490 490 471 158 145 129 86 50 46 45 41

萩原朔太郎

釈迢空

注解
解説
年譜

井上靖

541 528 523 511 501

口絵
挿画

「幼年時代」

畦地梅太郎

「犀星詩抄」

恩地孝四郎

岸田劉生

「幼年時代」「性に眼覚める頃」

「あにいもうと」「舌を噛み切った女」「はるあわれ」

「杏っ子」

畦地梅太郎

「杏っ子」

安西啓明

室生犀星

犀星詩抄

その二

ふるさとは遠きにありて思ふもの
そして悲しくうたふもの
よしや

うらぶれて異土の乞食^{かたゐ}となるとても
帰るところにあるまじや

ひとり都のゆふぐれに
ふるさとおもひ涙ぐむ

そのころもて

遠き^{*}みやこにかへらばや
遠きみやこにかへらばや

その三

銀の時計をうしなへる

ころかなしや

ちよろちよろ川の橋の上
橋にもたれて泣いてをり

その四

わが霊のなかより

緑もえいで

なにごとしなけれど

抒情小曲集より

小景異情

その一

白魚はさびしや

そのくろき瞳^{ひとみ}はなんといふ

なんといふしをらしさぞよ

そとにひる餉^けをしたたむる

わがよそよそしさと

かなしさと

ききともなやな雀^{すずめ}しば啼^なけり

懺悔の涙せきあぐる

しづかに土を掘りいでて
さんげの涙せきあぐる

その五

なににこがれて書くうたぞ
一時にひらくうめすもも
すももの蒼さ身にあびて
田舎暮しのやすらかさ
けふも母ぢやに叱られて
すもものしたに身をよせぬ

その六

あんずよ
花着け
地ぞ早やに輝やけ
あんずよ花着け
あんずよ燃えよ
ああ あんずよ花着け

京都にて

にはやかに恋ひぬれど
さめゆくものはつめたかり

わが心は哀憐にみちわたり
もののそよぎに泪おちむとす

雪の青きを手にとれば
雪は哀しくなじみまつはる

かばかりふかき哀憐のもよほしに
いまぞ涙ことごとく流れもいでよ

夏の朝

なにといふ虫かしらねど
時計の玻璃のつめたきに這ひのぼり
つうつうと啼く
ものいへぬむしけらものの悲しさに

寺の庭

つち澄みうるほひ
石落^{いば}の花咲き
あはれ知るわが育ちに
鐘の鳴る寺の庭

三月

うすければ青くぎんいろに
さくらは紅く咲くなみに
三月こな雪ふりしきる
雪かきよせて手にとれば
手にとるひまに消えにけり
なにを哀しと言ひうるものぞ
君が朱^{あか}なるてぶくろに
雪もうすらにとけゆけり

足羽川

あひ逢^あはずよとせとなり
あすは川みどりこよなく濃ゆし
をさなかりし桜ものびあがり
うれしやわが手にそひきたる

わがそのかみに踏みも見し
この土手の芝とうすみどり
いまふゆ枯れはてていろ哀しかり

われながき旅よりかへり
いま足羽川^{*}のほとりに立つことの
なにぞやおろかにも涙ぐまるは



ふるさと

雪あたたかくとけにけり
しとしとしと融けゆけり
ひとりつつしみふかく
やはらかく
木の芽に息をふきかけり
もえよ
木の芽のうすみどり
もえよ
木の芽のうすみどり

寂しき春

したり止まぬ日のひかり
*うつつまはる水ぐるま
あをぞらに
越後の山も見ゆるぞ
さびしいぞ

一日もの言はず

野にいでてあゆめば
菜種のはなは波をつくりて
いまははや
しんにさびしいぞ

利根の砂山

風吹きいでてうちけむる
利根の砂山、利根の砂山
赤城おろしはひゆうひゆうたり
ひゆうたる風のなかなれば
土筆は土の中に伸ぶ
なにに哀しみ立てる利根の砂山
よしや、すてつきをもて
君が名をつづるとも
赤城おろしはひゆうとして
たちまちにして消しゆきぬ

かもめ

かもめかもめ

去りゆくかもめ

かくもさみしく口ずさみ
渚はてなくつたひゆく

かもめかもめ

入日のかたにぬれそぼち
びよろとなくはかもめどり
あはれみやこをのがれきて
海のなぎさをつたひゆく

海浜独唱

ひとりあつき涙をたれ

海のなぎさにうづくまる

なにゆゑの涙ぞ青き波のむれ

よせきたりわが顔をぬらす

みよや濡れたる砂にうつり出づ

わがみじめなる影をいだき去り

抱きさる波、波、哀しき波

このながき渚にあるはわれひとり

あわれのみひとり

海の青きに流れ入ることし

蛇

蛇をながむるころ蛇になる

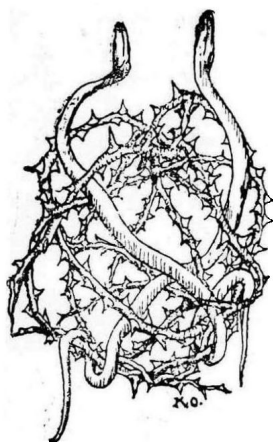
ぎんいろの鋭き蛇になる

どくだみの花あをじろく

くされたる噴井の匂ひ蛇になる

君をおもへば君がゆび

するするすると蛇になる



しら雲

かのしら雲を呼ばむとするもの
まことにかぞふるべからず
飛べるものは石となりしか
さびしさに啼き立つる
ゆうぐれの鳥となりしか

十一月初旬

あはあはしきしぐれなるかな
かたかは町の坂みちのぼり
あかるみし空はとながむれば
はやも片町あたり
しぐれけぶりぬ

十一月初旬

なめくちは樹に凍え
樹は二つに裂けぬ

はや冬のこしなり
海なりは空を行く

砂丘の上

渚には蒼き波のむれ
かもめのごとくひるがへる
過ぎし日はうすあをく
海のかなたに死にうかぶ

おともなく砂丘の上にうづくまり
海のかなたを恋ひぬれて
ひとりただひとり
はるかにおもひつかれたり

雪くる前

凍みて痛めるごとく
はてしなく
こころ輝き
枯木のうへにひびきを起す

わが君とわかれて歩めば
あらはるとなく

消ゆるとなく

ふりつむ我が手の雪を

ああ 君は掻く

秋の終り

君はいつも無口のつぐみどり

わかきそなたはつぐみどり

われひとりのみに

もの思はせて

いまごろはやすみいりしか

夜夜冷えまさり啼くむしは

わが身のあたり水を噴く

ああ その水さへも凍りて

ふたつに割れし石の音

あをあをと礫のあなたに起る

幾日逢はぬかしらねど

なんといふ恋ひしさぞ

煙れる冬木

もみづる山に朱き日は入る

しづかなることわが眼はひとりかがやけり

手に触るれど冬木の幹は青からず

その指はただに冷えたり

さしのぼる煙のなか

消えむとするみじめなるわれなるか

はりがねのごとき草の鳴る中

そのうちにわれの消えゆく音あり

蟬 頃

いづことしなく

しいとせみの啼きけり

はや蟬頃となりしか

せみの子をとらへむとして

熱き夏の砂地をふみし子は

けふ いづこにありや

なつのあはれに

いのちみじかく

みやこの街の遠くより

空と屋根とのあなたより

しいいとせみのなきけり

天の虫

松はしんたり

松のしん葉しんたり

すがたを見せぬ日ぐらしの

こゑを求めば

あらぬ方より

かなかなかなと寂しきものを

松のむら立つ

寺の松

梢をながめかなかなを求むれば

かなかなむしは天の虫

啼くとし見れば天上に

かなかなかなと寂しきものを

上野ステーション

トップトップと汽車は出てゆく

汽車はつくつく

あかり点くころ

北国の雪をつもらせ

つかれて熱い息をつく汽車である

みやこやちまたに

遠い雪国の心をうつす

私はふみきりの橋のうへから

ゆきの匂ひをかいである

浅草のあかりもみえる橋の上

郊外にて

畑について

のろのろと汽車はあるいてある

麦となたねのだんだん畑

汽車はのろのろあるいてある

のんきな汽車である